

# 集団で自己肯定感を高める、積極的な生徒指導のあり方 —総合的な学習の時間における地域交流学习を通して—

森山 晋

千葉大学教育学部委託研究生

本研究の目的は、自己肯定感を高めるために、共有体験を重ね、視野を広げ、他者から認められる学習を実践することの有効性を明らかにするものである。小学6年生を対象に、総合的な学習の時間で、児童と地域の人々が地域課題に向けて協働する実践を行った。その結果、児童が地域の人々との協働を通して、児童の自己肯定感が高まることが分かった。自己肯定感が低い児童に対しても、本実践は有効であった。また、地域課題に向けた協働する実践を通して、児童が大きな達成感や自己効力感を得て、地域の人々と繋がることのできた<sup>1</sup>。

キーワード：自己肯定感、積極的な生徒指導、地域、協働、体験活動

## 1. はじめに

内閣府(2018)の調査から、日本の若者の自己肯定感は、諸外国と比べ非常に低いことが明らかになっている<sup>2</sup>。また千葉県においても令和3年度全国学力・学習状況調査から自己肯定感に関する項目において、児童生徒ともに全国平均を下回る結果になっている<sup>3</sup>(国立教育政策研究所2021)。自己肯定感を育むことは、予測困難な未来を生きていく児童にとって、大きな変化や逆境を乗り越えていくために重要である。自己指導能力や自己実現をするための資質・能力を育成する生徒指導の視点からも、自己肯定感はその基盤になると考えられる。よって、自己肯定感を高めることは児童生徒の発達において重要な課題である。

筆者は、千葉県某市に勤務する小学校教員である。勤務校は大規模校であり、学区は新興住宅地部分が大半を占めている。保護者は、学校や教育への関心が高く、協力的な方が多い。地域では、自治会を基盤とする交通安全指導や学習支援ボランティアなどの児童との関わりがある。しかしながら、学校は児童と地域の関わりを、児童にとって受け身にさせてしまっていることや、学習を校内で完結させることが多い。全国学力・学習状況調査の結果から、勤務校の児童の自己肯定感が過去5年間、国や県の平均と比べて低いことが明らかになっている。また、大半の児童は学習や運動に一生懸命に取り組むことができるが、自信がなく自主性に欠ける様子からも、児童の自己肯定感が低いことが考えられる。

児童の自己肯定感を高めていくために、積極的な生徒指導の視点は重要である。まず、「積極的な生徒指導」の意味について考える。生徒指導提要の改訂に関する協力者会議(2022)において、八並は、積極的な生徒指導は全ての児童を対象としたプロアクティブな、つまり開発的で予防的な「育てる生徒指導」、あるいは「育てる教育相談」を指すと述べている<sup>4</sup>。さらに、八並(2008)は生徒指導の一つの類型として、「積極的な生徒指導」に該当するものを第一に挙げ、すべての児童を対象とした問題行動の予防や、子どもの個性・自尊感情・社会的スキルの伸長に力点を置いたプロアクティブな(育てる)生徒指導であることを説明している。これらを踏まえれば、積極的な生徒指導とは、「すべての児童を対象とした、成長を促すプロアクティブな(育てる)生徒指導」とあると言える。これを本研究における積極的な生徒指導としてとらえ、論じていくこととする。積極的な生徒指導の推進によって、児童生徒がよりよく成長し、問題行動予防が進み、自尊感情が高まっていくことで、自己肯定感を高めることにつながると考えられる。積極的な生徒指導の例として、児童の体験活動や協働的な学習の充実を図っていくことがある。内閣府(2022)は、「社会で求められるコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、変化に対応する力、多様な他者と協働する能力を育むためには、様々な体験活動が不可欠である」と示している<sup>5</sup>。積極的な生徒指導として、体験活動のような児童をよりよく成長させる学習の場を設定することが必要である。

これまで、体験活動によって自己肯定感が高まることを検証した研究が展開され、文部科学省は体験活動を学校や家庭、企業等に向けて広く推奨してきた<sup>6</sup>。しかしながら、自己肯定感を高めるためには、体験活動そのものだけ

---

Susumu MORIYAMA : Development-supporting Student Guidance that Enhances Self-esteem in a Group Through the Revitalization of the Relationship Between Children and the Community  
A Research Student Committed by Faculty of Education, Chiba University

ではなく、体験を通して、「誰と」「どのような」交流をするのかも重要ではないだろうか。なぜなら、自己肯定感は、自己評価や他者評価によって育まれるものであり、人間同士の交流の中で得られる部分があるからである。筆者も、学校と保護者間での連携によって自己肯定感を育むことを目指し、実践に励んできた。しかし、生徒指導の視点から、児童と地域の人々の交流の内容に着目して実践し、自己肯定感への影響を検証したことはなく、そのような先行研究は少ない。そこで、積極的な生徒指導の視点を活用し、児童と地域の人々が協働する学習を設定することで、地域の人々との交流を通じて、結果的に児童の自己肯定感を高める可能性に着目し、本主題を設定した。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1. 研究の目的

本研究の目的は、児童の自己肯定感を高めるために、児童と地域の人々が協働する学習を実践することの有効性を明らかにすることである。

### 2.2. 研究の方法

#### (1) 児童の自己肯定感を高める学習の設定

まず、自己肯定感を高める手立てや事例を調べる。次に児童と地域が関わる学習の事例を調べ、地域の自治会や子供会等の外部機関と連携し、地域の実態を知り、どのような学習ができるか検討する。

#### (2) 児童と地域の人々が協働する学習の実践

(1)をもとに、第6学年で総合的な学習の時間の単元計画を立て、所属校で授業実践を行う。

#### (3) 自己肯定感の変容の分析

実践授業前後の自己肯定感に関する尺度を用いた調査、質問紙、振り返りの記述を基に結果を比較する。分析の際には、結果を「下位群」「中位群」「上位群」に分け、群別に $t$ 検定を行う。また、実践授業での抽出児の変容を、学習履歴や担任の見取りから分析する。

#### (4) 継続性の検討

学習に協力いただいた地域の人々のアンケート回答から、実践の継続性を検討する。

## 3. 研究の内容

### 3.1. 児童の自己肯定感を高める学習の検討

#### (1) 自己肯定感のとらえ方

近藤(2013)は、「自尊感情は、基本的自尊感情と社会的自尊感情の組み合わせによって、成り立っている」とし

て、基本的自尊感情は、自尊感情を支える大切な感情であると述べている。近藤(2013)によれば、基本的自尊感情とは、成功や優劣とは無関係の感情であり、あるがままの自分自身を受け入れ、自分をかけがえのない存在として、丸ごとそのままに認める感情としている。一方、社会的自尊感情は、他者との比較による相対的な優劣による感情と整理している。

また、諸富(2015)は自己肯定感の認知的側面を自尊感情、対人的・社会的側面を自己有用感、能力側面を自己有能感、行為達成的側面を自己効力感と概念整理している。さらに、「そして、それらをすべて含んで、自分の醜いところ、人を恨んだり妬んだりする醜く汚い気持ちの存在もただそのまま、あるがままに認めることができるような『実在的な深さ』の次元まで包含した概念が『自己肯定感』。そんなふうに私は、概念整理を行っています。」とまとめている。さらに高垣(2021)は、「人間の自己肯定感とは、存在丸ごとの自己肯定感—自分が『あるがままの自分であって大丈夫』という感覚—でなければならない」と述べている。

これらの自己肯定感のとらえ方には、共通点が見られる。まず、三者に共通するのが、自らの全存在を肯定できる感覚を自己肯定感としてとらえている点である。この感覚が基盤となって、子どもたちはよりよく成長していく。自己肯定感の非常に重要な側面であると言える。次に近藤や諸富に共通するのが、対人・社会的側面である。これは、他者から評価や反応を受け、自分が優れていると感じることで高まる感覚である。

自己肯定感をとらえる上で、注意しなければならないこともある。高垣(2021)は、「自分の存在そのものを否定する気持ちは、すでにみたように競争で自分の位置を測る心からくるものだ」と述べている。これは、過度な競争や成功を賞賛する指導の危険性を示唆している。他者と比較して自分が劣っていると思ってしまう「自己否定感」に注意する必要がある。

これらの共通点や注意点から、本研究における自己肯定感を「他者とのかかわりの中で、自分の長所も短所も受け入れて、自分自身を肯定的にとらえる感覚」と定義する。なお、本研究では自己肯定感の主な構成要素を近藤(2013)の理論を基に、基本的自尊感情と社会的自尊感情を包含した概念としてとらえて論じていく。

#### (2) 地域の人々との協働と自己肯定感

児童と地域の人々が協働する学習を設定することが、児童の自己肯定感を高めることにつながるのではないだろうか。以下、その理由を述べる。

第一に、児童が地域の人々と協働することで、共有体験が生まれるからである。近藤(2015)は、「共有体験とは信頼できる他者と五感を通じた体験をともにし、その時そ

の場でともに感じ合うこと。すなわち『体験の共有』と『感情の共有』のことで」と述べ、共有体験を積み重ねることで基本的自尊感情が育まれていくとしている。児童にとって身近な信頼できる他者には、家族や友人、そして、地域の人々も考えられる。地域の交通安全指導や学習支援ボランティアの人々は、児童らが健やかに成長していくことを願っている。そのような願いのある人々と児童が協働する実践を通して、共有体験を重ねることになる。児童が様々な人々と共有体験することに、大きな価値があるのではないか。

第二に、児童が地域の人々と協働することで、様々な大人との関わり合いを通して、児童の視野を広げることが期待できるからである。諸富 (2022) は、「多様な視点を持つということは、ひとつの正解ばかりにこだわらないということ。これが『ほかの人と違う感じ方をしてもいい』という自己肯定感にもつながっていきます」と述べている。地域の人々と協働を通して関わることで、児童は自分自身の気付いていなかった面に気付いたり、自分とは違う考えを受け入れたりすることで、児童の視野が広がっていく。児童が新たな視野をもつことにより、現在の自分を肯定的にとらえることにつながり、基本的自尊感情が高まっていく。地域の人々の価値観や性格等は皆様々である。児童が様々な大人と関わることは、視野を大きく広げる機会になるだろう。

第三に、児童が地域の人々と協働し、他者から認められることが、自己肯定感の高まりにつながるからである。松田 (2011) は、小学校高学年の自己肯定感について、『自分ががんばったこと』『自分たちがみんなのためにやり遂げたこと』など具体的活動を周囲の人たちから評価され、それらが自分で納得できたときに育つと考える」と述べている。児童の自己肯定感を高めていくには、他者から認められる経験が重要である。児童が地域の人々と協働することで、地域の人々から認められる体験になるのではないだろうか。学校や家庭ではなく、児童にとって身近な社会である地域で、活動の頑張りを認めてもらうことの意義は大きい。しかしながら、児童の活動が成功しなければ認められないような条件付きの承認にならないよう注意したい。児童の活動が上手いかなかったとしても、頑張りを認められることが安心感を生み、自己肯定感の土台につながっていくと考えられる。

以上のことから、児童と地域の人々が協働することを通して、共有体験を重ね、視野が広がり、他者から認められる体験をすることで、自己肯定感が高まると考えられる。

### (3) 社会的基本的自尊感情尺度

自己肯定感の高まりを検証するために、「社会的基本的自尊感情尺度『Social and Basic Self Esteem Test』」(以下 SOBA・SET) を活用する。SOBA・SET とは、近藤 (2013)

によって開発・標準化された自尊感情を測定する尺度である。SOBA・SET は 4 件法のアンケート形式で、全 18 項目で構成されている。内容として、社会的自尊感情 (以下 SOSE) と基本的自尊感情 (以下 BASE) を測る項目が、それぞれ 6 つあり、回答の信頼度を判断するための項目も 6 つある。

SOSE・BASE には以下のような特徴がある。

SOSE は、「友だち」「運動」「勉強」に関する項目で構成されている (表 1)。

表 1 SOSE の項目

・ほとんどの友だちに、好かれていていると思います。
・運動は得意な方だと思います。
・ほかの人より、頭が悪いと思います。
・ほかの人より、運動がへただと思います。
・友だちが少ないと思います。
・ほかの人より、勉強がよくできると思います。

また、BASE は「自分の命」「自分の長所・短所」等の受容に関する項目になっている (表 2)。

表 2 BASE の項目

・自分は生きていていいのだ、と思います。
・何かで失敗したとき、自分はだめだと思います。
・自分はこのままではいけない、と思います。
・自分には良いところも悪いところもあると思います。
・ときどき、自分はだめだと思います。
・生まれてきてよかったと思います。

SOSE・BASE の点数は、回答毎の数値 (1~4 点) を合計して算出される。つまり、SOSE・BASE とともに最低が 6 点、最高が 24 点になる。

## 3.2. 児童と地域の人々が協働する学習の実践

### (1) 実態調査

実態把握を目的として、SOBA・SET を用いた調査を 9 月に行った。結果から、SOSE・BASE それぞれで下位群、中位群、上位群のグループに分けた (表 3)。検証授業の前後で自己肯定感の変容を、このグループをもとに考察する。

表 3 自己肯定感の調査 (n=146)

群	下位群 6~11 点	中位群 12~18 点	上位群 19~24 点
SOSE	14 名 (10%)	110 名 (75%)	22 名 (15%)
BASE	7 名 (5%)	105 名 (72%)	34 名 (23%)

全体の傾向として、自分の命や、長所・短所について、ある程度は受容できているが、何かで失敗したときに自己否定につながっている児童が多いことが分かった。

さらに、家庭環境や生育歴に課題を抱える児童の結果に注目した。このような児童たちは、尺度の得点が低く「生まれてきてよかった」「生きていていいのだ」の項目が低得点であった。要因として、他者との温かい関わりが日頃から不足していることが考えられる。

これらのことから、信頼できる大人との関わり合いを通して、成功を条件とせず、ありのままの自分が認められることで、児童の自己肯定感が高まるのではないかと考えた。

## (2) 指導計画の作成

藤川 (2014) は、「子どもたちが世のため人のために貢献しようとする意欲をもち、必要な知識・技能を学ぶようにする必要があります」と述べ、地域社会に貢献することを学ぶことの重要性を示している。これをもとに総合的な学習の時間において、「自分にもできそうな地域貢献」を探究するテーマとして設定し、児童が地域の課題解決に向けて地域の人々と協働する指導計画を作成した (表 4)。

表 4 単元の指導計画

時数	学習内容
1	○地域貢献の意味を知る。 ○単元の学習の流れを理解する。
2	○地域貢献の具体例を調べる。
3	○地域の人々から地域課題の話聞く。 ○美化活動の依頼を受ける。
4、5	○地域の課題に対して、自分たちができそうなことを考え、活動計画を立てる。
6～9	○地域の課題解決に向けて、児童が地域の人々と協働する。
10	○児童と地域の人々が感想交流する。
11	○単元全体の学びをまとめる。

## (3) 授業の実際

### ① 地域の課題を知る

第 3 時では、自治会長ら 3 名から地域課題について話を聞き、質問に答えてもらうことで理解を深めた。感染症対策のため、1 人 1 台タブレット端末を活用しオンラインで行った (図 1)。児童たちは多くの質問や提案をする等、意欲的な様子で参加していた。全体として地域の課題に真剣に向き合おうとする姿勢が感じられた。自治会長より、「一緒に美化活動をやってみませんか。」と依頼された。児童たちからは、「自分たちの手で地域をきれいにし、地域

貢献したい。活動が楽しみだ。」という声が多く聞かれた。地域課題の理解を深め、依頼を受けたことで美化活動の目的意識を共有することができた。

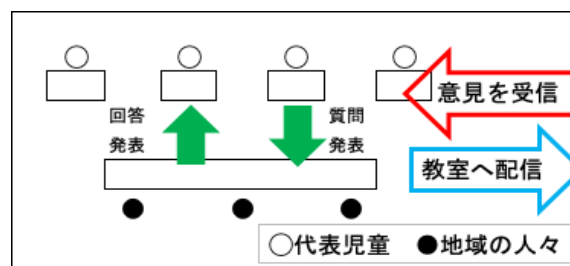


図 1 オンライン交流会の配信教室

### ② 地域の人々と協働する美化活動

第 6～9 時では、自治会長から依頼された場所の美化活動を行った。児童 150 名弱、地域からの協力者 14 名、担任含む教員 5 名が参加した。快晴の下、児童たちは地域の人々や友達と協力し、温かな雰囲気で行った。草取りやごみ拾いをしたことによって、外観がきれいになり、見通しもよくなった。学習後の感想では、「みんなできれいになってうれしい」「役に立ててよかった」「ごみ袋が何個にもなっておどろいた」等、達成感や自己効力感を感じているような内容が見られた。また、「地域の人々と協力できて嬉しかった」「また地域の人々と地域貢献をしたい」等、地域の人々との協働を肯定的にとらえた感想が多く挙げられた。



図 2 美化活動の様子

### ③ 美化活動の感想交流会

第 10 時では、第 3 時同様の形式で、自治会長ら 3 名を招き美化活動の感想交流会を行った。地域の人々の感想は、それぞれの視点から児童たちの頑張りを認め、励ます内容であった。その感想を児童が聞いた後に、さらに自分が考えたことを地域の人々へのメッセージとして、Google Classroom のストリーム上に投稿させた。対面

参加している代表児童が投稿されたメッセージから選び、発表することで全体共有した。授業時間内に16名のメッセージを紹介することができた。オンラインの利点を生かし、限られた時間で多くの情報を共有し、発表を苦手とする児童の考えも紹介できた。メッセージの内容は様々であったが、「地域の人々の考え方や行動力がすごいと思った」「子供と大人で協力して、いい地域にしていきたい」等、全てが地域の人々や地域貢献について肯定的な内容であった。また、参加児童全員が投稿することができた。

### 3.3. 自己肯定感の変容の分析

#### (1) 社会的基本的自尊感情尺度 (SOBA-SET)

まず、SOBA-SETの得点率の平均を比較したところ、変容が見られた。SOSE と BASE のどちらの数値も向上した(表5)。

表5 SOBA-SET 得点率の変容 (n=146)

	事前	事後	差
SOSE	63.7%	66.2%	+2.5%
BASE	68.9%	72.0%	+3.1%

さらに、群ごとにt検定を用いて比較したところ、表6のようになった。

表6 群別のSOBA-SETの変容 (n=146)

		事前	事後	t 値
下位	SOSE	9.71	12.14	t (13)=3.08 *
	BASE	9.86	12.00	t (6)=3.87 **
中位	SOSE	14.85	15.31	t (109)=2.90 *
	BASE	15.76	16.56	t (104)=4.32 **
上位	SOSE	20.32	20.41	t (21)=0.24 n.s
	BASE	20.41	20.02	t (33)=1.23 n.s

\*\*: $p<.01$ ,\*: $p<.05$

下位・中位群のSOSEとBASEにおいて有意差が認められた。その中でも特に、BASEでは1%水準で有意差が認められた。

なお、上位群に関しては、有意差は認められなかった。

これらのことから、授業実践を受けての検定において下位・中位群に対する有効性が示されたのではないかと考えられる。

次に、SOSEの変容に着目すると、「友達」に関する数値の向上が大きかった。これは、地域の美化活動や授業でのグループワークを通して、友達と関わる機会が増加したことによるものだと考えられる。

一方、BASEで比較的向上的な変容が大きかったの

は、「ときどき、自分はだめだなと思います。」と「自分はこのままではいけない、と思います。」の項目である。これらは、地域の人々との美化活動や感想交流を通して、児童が頑張りを認められたり、達成感を感じたりしたことが、自分を肯定的にとらえることにつながったことが要因として考えられる。また、「生まれてきてよかったと思います。」の項目に、事前で「ぜんぜんそう思わない」と回答していた児童が3名いたが、事後では0名であった。このような自己肯定感が特に低いと思われる児童たちにも、よい変容があったことは成果と言える。

#### (2) アンケート・記述分析

##### ① 共有体験について

児童と地域の人々が協働することによって、共有体験を生み出すことができたかを述べる。

まず、目的の共有がなされているかを選択式質問で調査したところ、ほぼ全員が正答(99%)であったことから、目的の共有はおおむねできていた。また、美化活動後の意識調査では、「安心できた」(98%)「楽しかった」(95%)「一緒に活動できてよかった」(94%)と肯定的な回答の割合が大きかった。地域の人々の活動後のアンケート結果からも、児童たちとの活動は楽しく、充実した時間になっていたと言える。さらに、感想交流会では、「またみんなで活動したい」「地域のためにみんなで活動すると気持ちいい」「みんなで地域を大切にしていきたい」等、地域や集団に対する肯定的な思いを学年全体で共有できた場面があった。よって、本実践の活動は共有体験になっていたと考えられる。

##### ② 児童の視野の広がりについて

まず、事前調査アンケートにおける児童の回答から、「学区のイメージ」を単語(複数回答可)で挙げさせた。挙げた言葉から、地域の人々に関する単語に注目したところ、「優しい」のみであった(図3)。児童たちは地域の人々の存在を認識し、優しいイメージを既にもっていることが分かった。



図3 地域の人々に関する言葉

事後調査では、地域の人々に関する言葉の種類は増加した(図3)。例えば、「地域貢献する」「学区を支える」「一緒にいて楽しい」等の言葉が新たに見られた。地域の人々に対する児童の認識が広がっていることが分かる。つまり、児童が地域の人々と協働した経験から、地域に対する新たな視点を獲得したと言えるだろう。

次に、美化活動後に児童が書いた感想の記述に着目する。児童が新たな視点や考え方に触れた様子として、「自分自身についての気付き」「地域の人々についての気付き」に関する記述に注目する(表5)。

表5 活動後の児童の感想(一部抜粋)

- ・とてもつかれたけど、今まで感じたことのない達成感を得た。
- ・地域がきれいになると自分もうれしいし、気持ちがいい。
- ・地域の役に立ち、みんなと協力できたことが嬉しかった。
- ・実際に活動して分かったのが、地域の人々と交流して自分も少し成長できたと思いました。
- ・草取りに熱中して、とてもつかれましたが誇らしい気持ちとうれしい気持ちでいっぱいになりました。
- ・3人の話を聞いて、僕たちのことを考えてくれていると思った。
- ・地域の方々が定期的にそうじをしてくださっていて、ありがたいなと思いました。
- ・地域には、いい人がたくさんいた。
- ・地域の人々には日頃からみんなのために色々な工夫をしていることが伝わった。

「自分自身についての気付き」では、地域貢献をした後に自分自身に嬉しい感情が生まれることへの気付きがあり、肯定的に自分をとらえている様子である。また、自分たちは色々な人たちに支えられていることは、他者から自分が大事に愛されているというBASEとの関連性が考えられる。「地域の人々についての気付き」では、地域の人々の優しさに加えて、すごさやありがたみを感じている感想が見られた。

以上のことから、児童の視野がある程度は広がったと言えるのではないだろうか。

### ③ 児童が認められる体験について

地域の人々との協働が、児童にとって他者から認められる体験になったのか考察する。美化活動後の児童のアンケートの回答から、ほとんどの児童は活動しているときに地域の人々と関わりをもっていた(94.4%)。また、「地域の人々と活動して、うれしかったですか。」の質問には、95.1%の児童が肯定的な回答であった。このことから、児童は地域の人々との関わりをおおむね肯定的にとらえたと言える。次に、やりとりの内容に着目する(図3)。

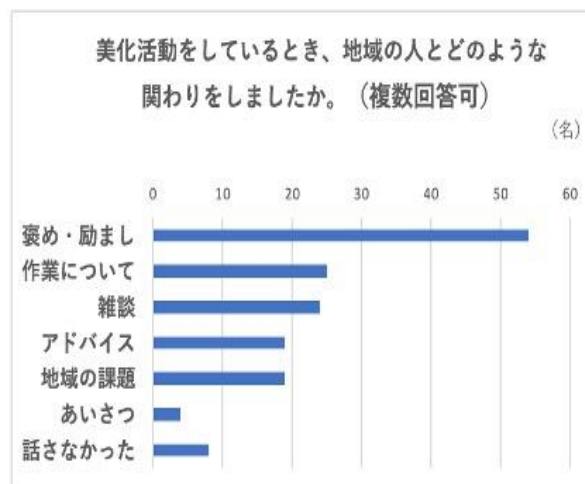


図3 児童と地域の人々の関わりの内容

最も数が多かったのが「褒め・励まし」であったことから、多くの児童が地域の人々から頑張りを認められていたことが分かる。また、「作業について」や「アドバイス」等も多かった。これらは、地域の課題解決に向けて、児童と地域の人々が協働するという関係性から生まれたやりとりであると考えられる。また、「雑談」が三番目に多かったことから、児童が安心して交流できたと考えられる。

いずれのやりとりに対しても、「地域の人々と交流できてうれしかった」「地域の人が色々なコツをアドバイスしてくれた」等、児童たちが喜びを感じた記述が見られた。児童たちは協働する同志として存在を認められて活動できたことで、嬉しい気持ちを抱いたのではないだろうか。

しかしながら、美化活動で地域の人々と「話さなかった」と回答した児童が8名いた。元々、黙々と作業することが好きであったり、コミュニケーションへの嗜好や得手不得手があったりする等、児童の実態は様々であるが、このような児童たちにとっては、第10時の感想交流会が認められる体験になった。美化活動の際は、地域の人との直接的な関わりが薄かったのかもしれないが、感想交流会では、学年全体の頑張りを認められる場面が何度もあった。そして、「地域の人々と活動できてよかったですか」の質問に対して、この8名全員が肯定的な回答をしていた。感想交流会を行ったことが、様々な実態の児童たちを認めることにつながったのではないだろうか。

以上のことから、地域の人々との協働が児童にとって頑張りが存在を認められる体験になっていたと考えられる。

### (3) 抽出児の変容

事前調査におけるSOBA-SETの数値が低く、家庭環境や生育歴に課題がある児童から1名を抽出して、変容に着目した。

抽出児(以後児童A)は、学習や運動が苦手であり、休み時間を一人で過ごすことが多く、学校を欠席することも

多い児童である。

まず、SOBA-SET の変容に注目する。児童 A の SOSE と BASE の数値は、ともに向上した（表 6）。

表 6 児童 A の SOBA-SET の変容

	事前	事後
SOSE	9	13
BASE	9	13

さらに、SOBA-SET における質問項目で、自己肯定感との関連性があるものに注目する。まず、SOSE では、「ほとんどの友達に好かれていると思います。」に対して、「そう思わない (2)」から「そう思う (3)」に向上した。また、BASE では、「自分は生きていていいのだと思います。」に対して、「ぜんぜんぞう思わない (1)」から「そう思わない (2)」に向上した。

美化活動後の意識調査では、地域の人々と活動できたことを「嬉しかった」「協力できた」等、肯定的に振り返っていた。地域の人々からは「頑張っているね。」と励ましの言葉をかけてもらい、笑顔を見せながら活動する姿が見られた。

また、美化活動をして地域をきれいにできたことに達成感を感じていた。頑張りを認められ、活動に達成感を感じたことが、自己肯定感の高まりに影響したと推察する。信頼できる大人との共有体験や、他者から認められる体験ができたことは、児童 A にとって価値が大きいと考える。

実践後、児童 A は学校行事の役員活動で活躍したり、新しい友達が増えたりして、欠席が減ってきたことが担任からの聞き取りで分かった。

#### (4) 継続性の検討

生徒指導の視点から、児童と地域の人々が協働する学習をいかに継続していくかが重要である。以下、継続性について検討する。

第一に、取り組みの意義である。この活動について「大変有意義」と美化活動に参加した地域の人々 14 名全員が評価した。理由には「地域貢献を通しての子供の成長が期待できる」「子供が一生懸命活動していて感動した」等、児童と地域の人々どちらにもメリットが挙げられた。双方にメリットがあることは、実施する意義を周囲の人々に理解してもらう上で大切である。また、「子供と地域の人との繋がりが出来る」という理由もあった。地域の人々にインタビューしたところ、この学習を機に学校内外で話しかけてくる児童が増えたことが分かった。児童たちが信頼できる身近な大人との繋がりを増やせたことに、本実践の大きな価値があるだろう。

第二に、指導計画の柔軟性である。意義のある活動を継続することは重要だが、同じ活動の繰り返しになり、形骸

化してはいけない。児童たちと地域の人々の実態や発想等を活かすことができる指導計画にしていくことで、形骸化せず継続していけるのではないだろうか。

第三に、協働する人材の確保である。本実践では、地域の自治会を中心に、社会福祉協議会、子供会等と連携した。継続的に身近な大人に協力していただくためには、学校と外部機関との連携を充実させていく必要がある。

## 4. 研究のまとめ

### 4.1. 成果

#### (1) 自己肯定感の高まり

本研究では、児童と地域の人々が地域課題に向けて、協働する学習を実践したことで、児童が共有体験を重ね、視野を広げ、他者から認められることで、自己肯定感が高まることが分かった。集団で美化活動を行い、地域がきれいになったことで、児童が大きな達成感や自己効力感を感じることができた。美化活動後の感想交流会は、児童が地域の人々から頑張りを認められ、それぞれの考えや思いを共有できたことが、自己肯定感の向上につながったと考えられる。また、自己肯定感が低い児童に対して本実践は特に有効であった。学校の中だけで、自己肯定感が低い児童を高めていくことは難しいことである。そのような児童たちへの有効性を確認できたことに、本実践の意義があると考えられる。

#### (2) 児童と地域の人々の繋がり

児童が地域の人々と協働したことで、児童が地域の人々と繋がる機会になった。児童と地域の人々が、こういった結びつきを強めることは、学校現場では中々取り組めないことである。児童のよりよい発達を支える大人が身近な地域に増えたことは、積極的な生徒指導として、かなり有効な取り組みと評価していいだろう。

### 4.2. 課題

#### (1) 継続性の検討

児童の健全育成を広い視野から考えるために、開かれた生徒指導の推進を図ることが重要である。そのためには、児童と地域の人々が交流する学習を継続していく必要がある。学習を継続していくには、取り組みの意義を学校と地域で共通理解していくことが大切である。そして、双方に無理のない内容、頻度で計画的に実施していくことが重要である。また、交流する人材を継続的に確保していくために、地域の自治会や社会福祉協議会等の外部機関との連携を充実させていく必要がある。

#### (2) 検証方法の再検討

本研究では、自己肯定感の高まりを検証するために、主

に尺度と自作アンケート、振り返りの記述から検証したが、活動と関係性が薄い内容もあった。尺度や質問紙の内容は、活動に合ったものを検討する必要がある。また、自己肯定感を高める手立てとして、共有体験を重ね、他者から認められることを中心に検証したが、達成感や自己効力感も自己肯定感に大きく影響したと考察した。今後は、これらも検証する視点としてもつことにしたい。

- 
- 1 本論文は、筆者の「令和4年度千葉県長期研修 研究・研修報告書」の内容を再構成し、修正・加筆したものである。
  - 2 内閣府（2019）「令和元年度版子供・若者白書（培養版）」  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/pdf/b1\\_00\\_01\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/pdf/b1_00_01_01.pdf)（2023年2月28日最終確認）
  - 3 国立教育政策研究所（2021）「令和3年度全国学力・学習状況調査 調査結果資料（都道府県別）」  
[https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/factsheet/12\\_chiba/12p\\_21a.xlsx](https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/factsheet/12_chiba/12p_21a.xlsx)（2023年2月28日最終確認）
  - 4 文部科学省（2022）「生徒指導提要の改訂に関する協力者会議〔第2回〕議事要旨」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/168/gijiroku/1413457\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/168/gijiroku/1413457_00004.htm),（2023年2月28日最終確認）
  - 5 内閣府（2022）「令和4年度版子供・若者白書（概要版）」  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04honpen/pdf/s2\\_1-1.pdf](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04honpen/pdf/s2_1-1.pdf)（2023年2月28日最終閲覧）
  - 6 内閣府（2022）「令和4年度版子供・若者白書（全体版）」  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04honpen/pdf/s2\\_1-1.pdf](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r04honpen/pdf/s2_1-1.pdf)（2023年2月28日最終閲覧）

#### 引用文献

近藤卓（2013）「子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット（SOBA-SET）で自尊感情を測る」、ほんの森出版、pp.12-

13、pp.62-63

- 近藤卓（2015）「乳幼児期から育む自尊感情 生きる力、乗り越える力」、エイデル研究所、p.50
- 高垣忠一郎（2021）「悩む心に寄り添う自己否定感と自己肯定感」、新日本出版社、p.14、p.82
- 内閣府（2022）「子供・若者白書令和4年度版」、日経印刷、p.19
- 藤川大祐（2014）「授業づくりエンタテインメント！—メディアの手法を活かした15の冒険—」、学事出版、p.140
- 諸富祥彦・松田憲子（2011）「ほんものの『自己肯定感』を育てる道徳授業 小学校編」、明治図書、p.109
- 諸富祥彦（2015）「『問題解決学習』と心理学的『体験学習』による新しい道徳授業」、図書文化、p.99
- 諸富祥彦（2022）「イラストでわかる自己肯定感をのばす育て方」、池田書店、pp.122-123
- 文部科学省（2010）「生徒指導提要」
- 八並光俊（2008）「新生徒指導ガイド」、図書文化、p.16

#### 謝辞

研究に関してご指導いただきました、千葉大学教育学部教授藤川大祐先生をはじめ、検証授業に協力して下さった地域の方々、小学校の職員、児童の皆様に心から感謝申し上げます。